

足利四代將軍義持の頃には、室町幕府の權威は失墜し、「日本開白以來、土民蜂起これ初めなり」と世人を驚かせた正長の土一揆は、正長元年（一四二八）に発生した。この正長の土一揆発生の前年、つまり応永三十四年（一四二七）に佐賀市蓮池町から諸富町境一帯の小曲の地を拠点とした小田氏の下向がみられる。その後小田氏は典型的在地領主（国人）として成長していくのである。小曲城の天守閣は大字大堂字小曲の通称奥山の地にあつた。この地は明治二十四年（一八九一）調査の地質図の模写によれば、周囲の土地より一〜二米ぐらい高くなつていたようである。

小田氏は源頼朝の重臣八田知家（下野国茂木郡地頭職）の後裔といふ。『諸家系図』（佐賀県立図書館所蔵）所収の「小田氏系図」による



小曲城の天守閣跡地の通称奥山
(左手は佐賀江)

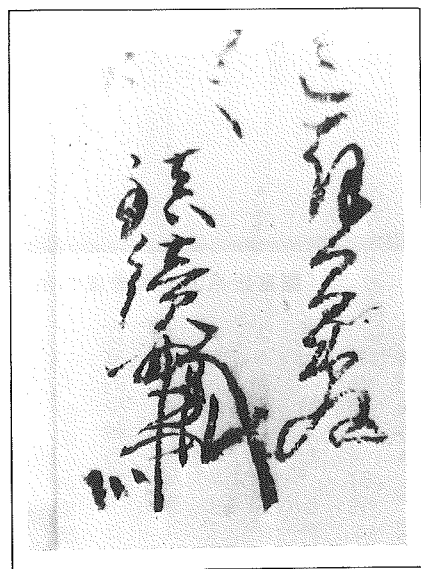
三 小田氏と少弐氏

(一) 小田氏の入封

諸富氏は後述する小曲城主小田氏や、田中城主の太田氏との関係は不明である。ただ、諸富鎮續が三根郡西島（現三養基郡三根町西島）城主の横岳氏に宛てた書状が二通残っている。その一通には、

尚々前日海月巻五送給候、則賞翫仕候、兼又其元之様躰、御油断多く御格護専一候、我等茂来月廿日比、出頭可申覚悟候、自然豊州へ御用共候者、無沙汰仕間敷候、子細彼者可申候、（中略）仍而今度豊前目在陣仕候之處、

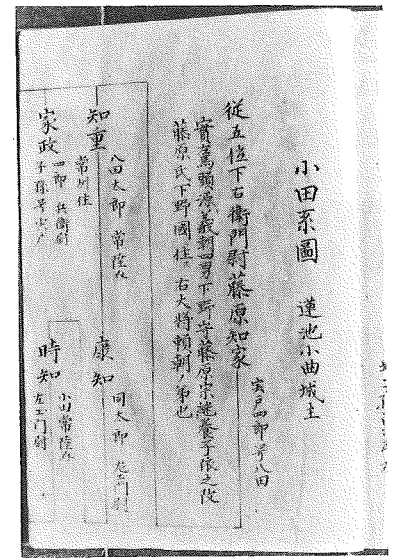
とある。文中に「豊州へ御用」「豊前目在陣」とあり、豊前とは大友氏を指すものと考えられる。であれば、横岳氏と親密な関係にあつた諸富氏は、横岳氏とともに少弐党であり、ともに大友氏との因縁があつたものであろう。小曲城主の小田氏も少弐党であるから、小田氏と近密な関係にあつたと考えられるが、それを証明する史料が見当たらない。諸富氏の解明は今後の課題である。



諸富鎮續の花押

（「横岳家文書」）

と、その祖を「実ハ左馬頭源義朝四男」と記しているが、義朝の四男は義門であり、当代系図の根本とされる南北朝に洞院公定が集大成した『諸家大系図』（別名、尊卑分脈）の義門の条には、「宮内丞、左兵衛（兵衛尉）、義門早世」とあり、義門説は誤りかと考えられる。「小田氏系図」には、「下野守藤原宗継養子、依之改藤原氏下野国二住ス」と記している。知家の三代の後、八田時知は常陸国筑波郡小田の城主となった。時知の三代の後、小田治久は元弘三年（一一三三）より後醍醐天皇方についている。南朝の重臣とされる三房の一人北畠親房は、この治久の庇護をうけ小田城中で著名な『神皇正統記』・『職原抄』を著わした。治久の三代の後の持家は、関東八館の一人とされたが、その弟直家が鎮西小田氏の祖である。直家は一時筑後国に住したという。直家の子直光は分家して応永三十四年（一四二七）肥前に来住し、神埼郡蓮池から佐賀郡川副郷に跨る一帯に小曲城を構築した。『肥陽軍記』に、「長江をめぐれるを城壘とし」と記しているが、小曲城は曲流する佐賀江を要害として築かれたのである。築城当時の佐賀江は、「佐嘉郡高尾ヨリ来リ東西村ノ北長林ニ傍テ東流シ、南ニ折レ蓮池ノ西ヲ画シ陣内村ニ至リ、又タ東ニ折レテ小曲村ノ南ヲ走り大堂村ニ達ス」（『蓮池日史略』）であった。その後「鍋嶋家ニ至リテ其古流ヲ変シ、佐嘉今宿ヨリ犬尾ヲ経テ蓮池・小曲ノ間ヲ穿テ、迂曲シテ大堂村ニ達セシメタリ」（『蓮池日史略』）とある。これに対して川副博氏（元山口大学教授）は、「龍造寺隆



「小田氏系図」（佐賀県立図書館蔵）

信をめぐる北肥前の情勢」（『西日本文化』一〇二号）で、「小田氏の蓮池の居城は平城で、周囲は佐嘉江が環流した小曲の輪の内に在りて小曲城と称した。（中略）俗説には天正十二年（一五八四）湖水を佐嘉城下今宿に迄上するために、水利土功に長ぜし成富兵庫茂安の遺業と言うも、北肥前の水利土功を録する『疏要書』にも見えず、他書亦見当たらず徴証するところがなく恐らく以前から存在し、築城が却ってこの環流を要害として利用したものではなからうか」と、佐賀江の流路の変化に否定的な見解を述べられている。ところが、貞享四年（一六八七）改正、明和九年（一七七二）改補の『御領中諸郡鄉村附』（佐賀県立図書館所蔵）によれば、

佐嘉郡 川副東郷

一、駕輿丁村 陣内 一、大堂村

一、太田村 土師

一、小田ヶ里 一、小曲村

元古瀬郷也、元禄末ヨリ当郷ニ成ル

同上

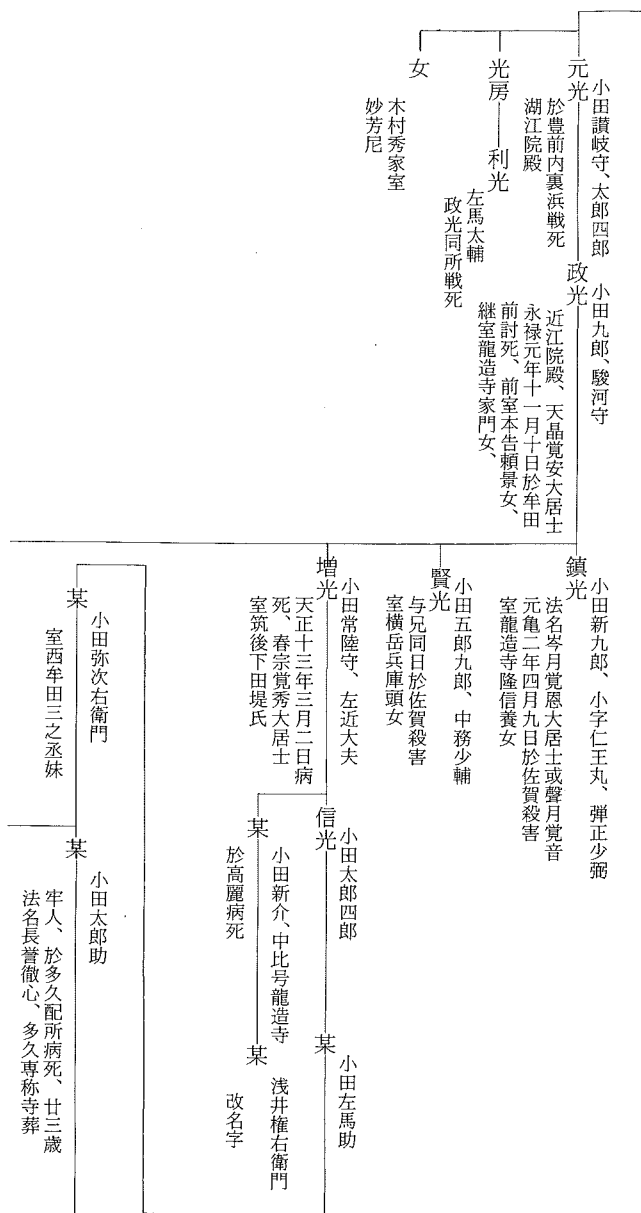
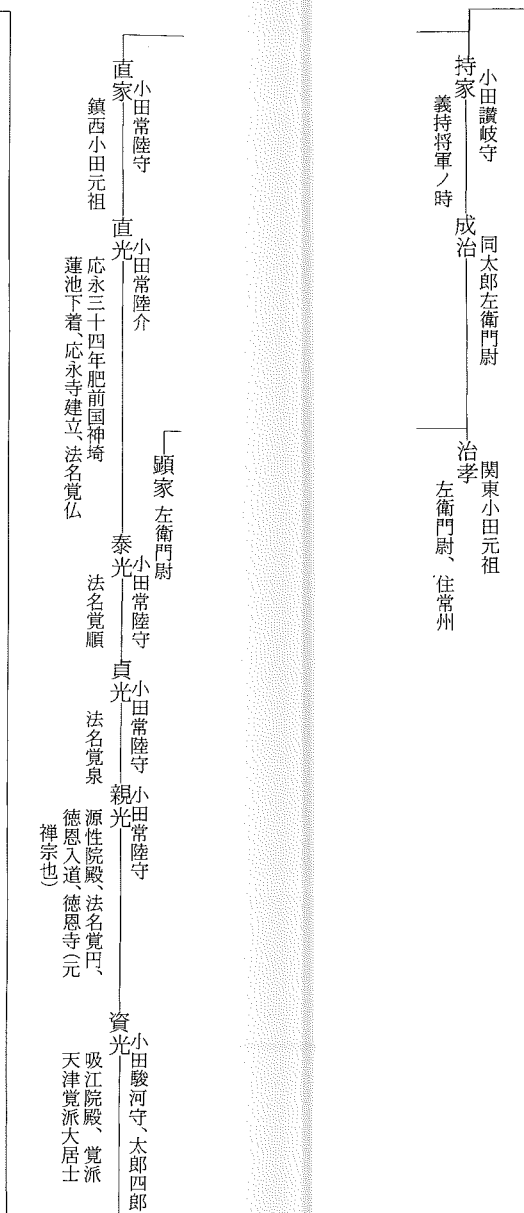
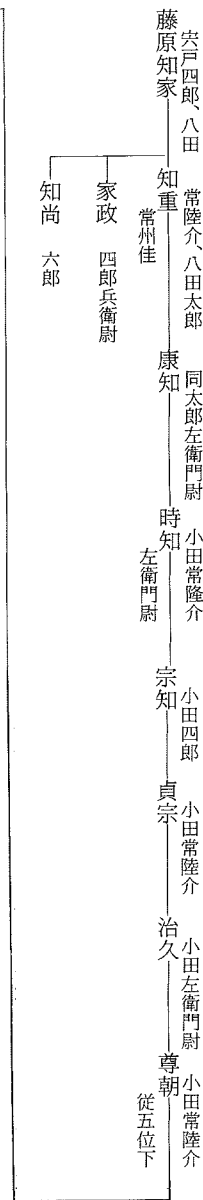
とある。小田ヶ里・小曲村は古く古瀬郷であった。巨勢郷と川副郷の郷境は古くから佐賀江とみるのが妥当であるから、小田ヶ里・小曲両村の南側を佐賀江が東流して、大堂に達していたという『蓮池日史略』の説を裏付けている。つまり、佐賀江は元来今の諸富町内域を南東流し、佐賀江の北側にある小曲城の天然の城堀をなしていたのである。現在の佐賀市蓮池町と諸富町の境界をなす部分の江湖は、江戸時代の初め水利と遊水を考えて新しく開さくされた。そこで江湖南となった小田ヶ里・小曲村が新しく川副郷に編入されたのである。その工事は成

富兵庫茂安の指導によってなされたと考えられる（この項地理篇参照）。

小田直光は築城と前後して、隣接の佐賀郡巨勢郷東西（現佐賀市巨勢町東西）に応永寺（上佐嘉郷春日山高城寺の末寺）を造営した。同寺はその後衰微した。そこで、元禄十六年（一七〇三）蓮池藩二代藩主鍋島直之が、亡き世子直富（仁恕院）のために、応永寺跡の隣地に黄檗宗の宝樹山龍津寺を化霖道龍の開山で創建した。その龍津寺も昭和二十年（一九四五）の空襲で焼失し、廃寺となった。なお、境内には小田覚派（資光）の墓碑が残っている。

小田氏は直光以来代々少弐氏に担担して、神埼・佐賀両郡及び筑後三潞郡に跨る領田六〇〇〇余町を所有する大身に成長したという。しかし、江戸初期の『慶長肥前国絵図』には、大中島・大野島・大詫間はまだ中洲の状態であるので、領田六〇〇〇余町のなかには千瀉・湿田などを相当広く含んでいたと考えられる。また、三潞郡への進出状況も不明である。

では、『諸家系図』に所収されている「小田氏系図」の全文を掲げると、



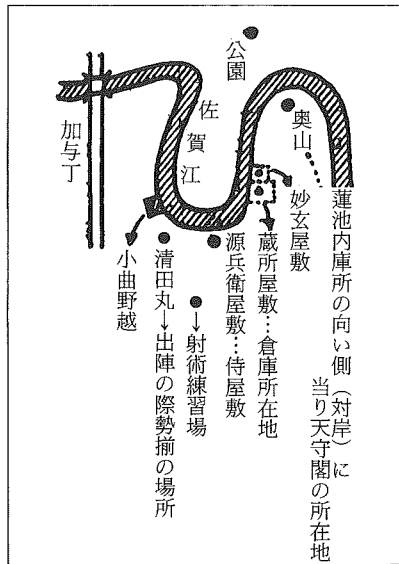
肥前国群伯千葉・高木・龍造寺・小田・江上・於保・姉川等与横岳頼房相会伐。探題廿日渋川武蔵守源満直卒於肥州神埼陣。年四十五、謚龍華院殿。

とあり、小田貞光の出陣を記している。これは小田氏肥前入部以来最初の参戦と考えられる。横岳頼房は以後三根郡西島に拠った。その後小田氏は少弐氏と主従の因縁を深くし、その地盤を固めていくのである。大宰少弐の地位を世襲している少弐氏の家柄・伝統が、戦国期に至ってからも小田氏等の肥前の在地領主の支持を受けたの

田貞光は少弐貞頼の加冠、親光は大友政親の加冠、資光は少弐政資の加冠と判断している。小田氏と少弐・大友両氏の因縁からみて十分に想像できるところであるが、推測の域を出るものではない。

小田氏の肥前で活躍を文献上で確認できるのは、直光の孫貞光からである。永享六年（一四三四）少弐満貞の弟横岳頼房は少弐氏復興を策し、鎮西探題渋川満直を攻めた。『九州治乱記』（『北肥戦誌』ともいう）には、

図9 小曲城周辺の通称名



小曲城跡の標柱

- 名八石
- 女子 小城木村太郎左衛門室
法名近誓寿清
- 女子 実木村太郎左衛門女、太郎助依無子養姪讓系図。依太郎助
早世後、本庄源太左衛門養女ニシテ、嫁米倉兵藏。法名繁
松栄室。本庄源太左衛門・米倉兵藏皆多久家士也、毛利判
右衛門、女子留利、皆於石所産也
- 女子 犬塚播磨守盛家室、法名寛心
- 女子 犬塚長門守鎮直室、法名覚普
- 女子 龍造寺和泉守長信室、法名芳若
- 女子 米倉六郎太郎室
- 信安 徳島左衛門大夫、徳島土佐守養子
- 信直 高木式部少輔、高木氏養子

応永三十四年（一四二七）蓮池に下着した小田直光は、佐賀江を利用し小曲城を構築した。『肥前旧事』の注には下向の事情を、「小田ハ常陸ノ豪族元寇防禦ノ功ニ依リ、此地ヲ賜ヒ下着セシト云フ」とある。また、多久家の『御書物写』の中で小田家を調査した石田一鼎（江戸時代初期の儒学者）は、「直光ハ足利ノ直冬朝臣九州下向之時」同行したと記しているが、この二説は若干時期が古すぎると考えられ、小田氏の肥前下向の理由は不明である。おそらく、中世期によくみられた東国御家人の西国下向の例と考えるのが適当であろう。さらに、石田一鼎は小

である。同要略によると、嘉吉元年（二四四一）に、大内介将大兵渡海来于、筑前先陣進至。肥前少貳一族馬場・横岳・宗・出雲・筑紫・姉河・小田・江上、三根・養父・佐嘉・神崎・小城郡々士、屯三根郡以相支中国勢云々。

とあり、少貳党の一員として小田氏が、九州侵攻の中国大内氏と会戦している。

光法（現佐賀市北川副町）の地頭藤原龜益の孫六郎太郎広元が垣内氏を称したのは、応永年間（二三九四〜一四二七）であろうと考えられる（『東川副村誌』）。同村誌の「垣内氏系図」によれば（一二二頁）、光法名之別郷構一郭、深堀高土井一、振大柵一、防凶賊一、守二里民一、其構依二嚴重一、自是郷民称而垣内殿云。依之自然成二家名一、為折子孫之榮久一、館内氏神天神勧請とある。さらに同村誌には、

垣内元祖川副東郷山領村を領地として、同村分之内福田村に代々居住せし由、其館跡今に残りて、松柏生い茂り、石塔数多並建つ。其傍に百姓善五郎と云う者の屋敷の隅に大樹の楠あり。下に扉紛失の祠あり。是れを百姓共に垣内天神と申候。亦流鏑馬と申伝由。一説に垣内元祖の乗馬死して後、此霊の咎めあるを恐れて、百姓是を崇め祭り来る事年あり。



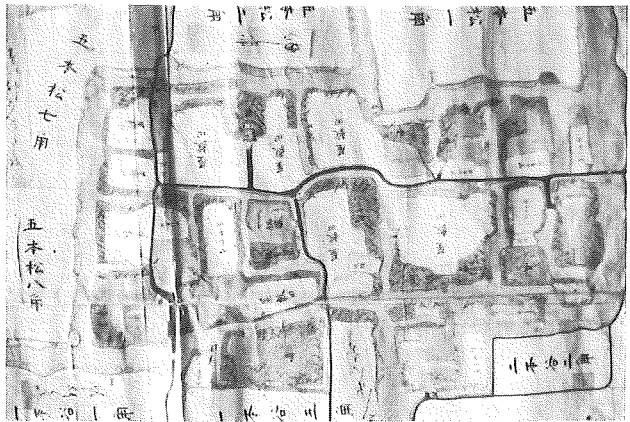
『九州治乱記』（佐賀県立図書館蔵）

小田氏の入封

と記している。寛政五年（一七九三）の『川副東郷福田村絵図』（佐賀県立図書館蔵）によれば、福田村には天神・八龍社・鎮守権現が記載されており、典型的な環濠集落をなしている。天神付近一帯が垣内氏の館があつたところである。垣内広元の孫新左衛門尉資家は少貳政資に属しているが、資家が少貳氏に属するようになったのは文明年中（一四六九〜八六）と考えられる。資家の孫右近允光家は少貳政資の子資家に仕えている（『東川副村誌』）。光家の孫垣内右馬允元実はのち龍造寺隆信に属し、当町福田を拠点として活躍している。

延徳二年（一四九〇）少貳政資は肥前を征し、筑後に入った。豊後の大友政親も少貳政資に合流した。この際筑後三瀬郡の諸富氏は、西牟田・酒見・城島・鐘ヶ江の諸氏とともに少貳氏に加担している（『九州治乱記』）。

小城の千葉胤繁（少貳政資の弟胤資の養子）は小城郡三日月の高田城にいた。明応七年（一四九八）春、東尚盛・筑紫満門等の大内氏に攻められた千葉胤繁は、佐賀郡川副郷太田（現諸富町太田）に逃れてきて、龍造寺等の旧好の武士に援を求めた。一五世紀末になると龍造寺氏の勢力が諸富一帯に及んできていることを示している。龍造寺胤家は胤繁への援助を主張したが、弟家和は自重論を述べて決しなかった。胤家は家臣の成富胤秀



『川副東郷福田村絵図』（中央の天神社付近が垣内氏館跡）



現在の隣江山宝光院

や木塚直喜などに相談し、太田和泉守や光増・石井・南里・鹿江・山領等の川副郷士も加えて、千葉胤繁のため二月下旬出発した。胤家は川副郷の太田で大内勢と戦った。形勢は有利であったが、胤家の一族千葉興常が大内方に加担したため、龍造寺胤家は千葉胤繁と共に筑前に逃れた。この太田の合戦で数多くの戦死者が出たので、永正・大永年間(一五〇五〜二七)に龍造寺胤家の甥家純(龍造寺家兼の子)の子蒙覚法印が、この地に天台宗の隣江山密厳寺宝光院を建立し、義弟の澄舜法印を住持とし、その菩提を弔った。

一六世紀にはいると龍造寺氏の勢力は諸富町域にもかなり進出し、相当な所領を領有するようになったと考えられる。『馬渡家譜』によれば、

肥前佐嘉ノ郡川副之庄諸富ノ内居屋敷五ヶ所、耆地荒野両所為意所被進候
(二五二五)
永正十二年閏十月廿日

龍造寺新二郎胤久

馬渡右兵衛殿
(後仲)

とある。さらに「俊仲属龍造寺胤久公之旗下蓋是馬渡氏之属龍府之初世」と付記している。馬渡氏は松浦郡馬渡島出身の在地小領主であるが、諸富内の五ヶ所の土地の給与を契機として、馬渡氏が龍造寺氏配下にはいったの

である。諸富内の所領の給与をきっかけとして、龍造寺氏が松浦党の小領主を家臣化していく経過を示す貴重な史料である。松浦党の馬渡氏はまず武雄に本拠を移し、六角川をくだり有明海を往来し、寺井港に出入するうちに龍造寺氏と接近するきっかけとなったのであろう。なお、龍造寺民部大輔新二郎胤久とは村中龍造寺氏の出身で、隆信の母慶閨尼の叔父にあたる。龍造寺胤久は小城の千葉氏に接近しながら、諸富への進出をみせている。肥前国佐嘉郡尻田分六十町、同郡千数三十町、并小城郡大寺三十六町、同郡別府百廿町、此内除岩部分廿町、并佐嘉郡大宝四十町、口住十二町、諸富十二町之事

右任先例之旨、知行不可有相違之状如件

(二五二四)
大永四年三月廿八日

(肥前守護代千葉興常)

平(花押)

龍造寺民部大輔殿
(胤久)

(『龍造寺家文書』)

とある。胤久は小城の千葉興常より諸富内一二町を給与されている。これは当時の佐賀一帯では千葉氏が主導権を握っていることと示している。諸富氏も元来龍造寺氏と同じく千葉氏に従っていたと考えられる。その他諸富周辺出身としては、光益・太田・渋谷・南里・鹿江・石井の各氏が千葉氏に従っていた。

『九州治乱記』には大永四年(一五二四)四月、小城の牛頭城に関して、

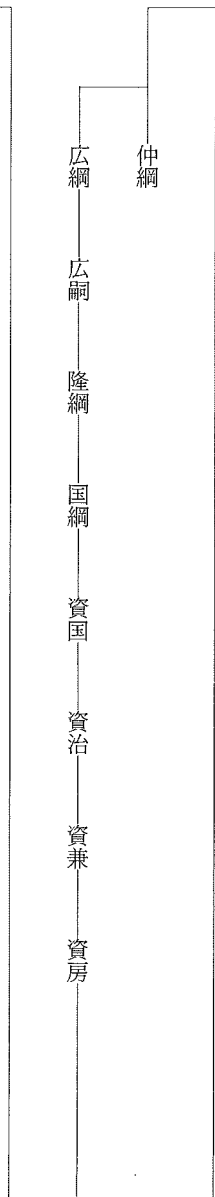
千葉胤勝(胤資の子で胤繁の弟にあたるが、実は横岳資貞の三男)、大内へ通スル由聞エシカハ、加世中佐嘉ノ龍造寺、蓮池ノ小田資光、四月小城へ取掛、胤勝打負テ五月落城。時二興常小城へ帰入ル。

とあり、千葉氏の内紛に際して小田資光が龍造寺氏と共に介入している。小田資光は蓮池に下向してきた直光の四代の孫にあたる。この時期は小田・龍造寺氏ともに少弐氏の意をうけて同一の行動をとっている。小田氏はこの資光時代に有力な在地領主として成長するのである。

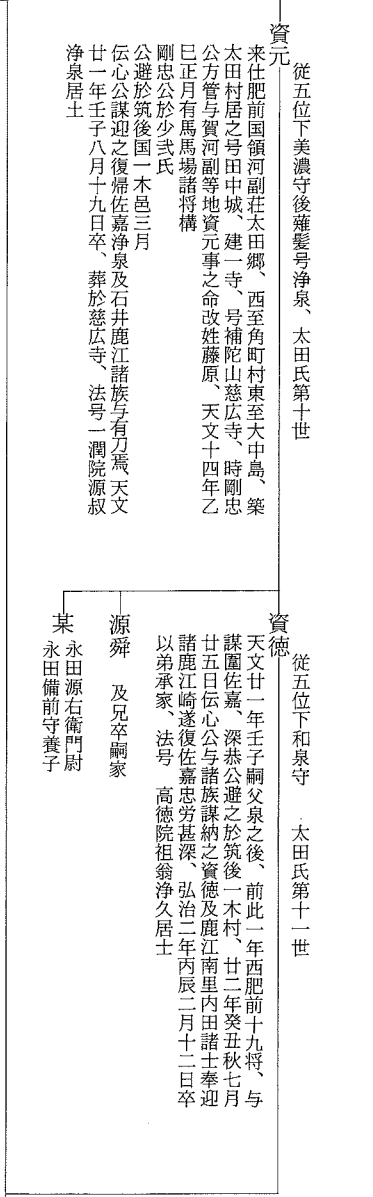
(二) 太田氏の下向

小田氏の下向に遅れること一〇〇余年、小田氏と共に戦国期から近世初頭にかけて当町に大きな足跡を残している太田氏が、享祿二年（一五二九）に下向してきた。『御家老系図』（佐賀県立図書館所蔵）の「太田氏系譜」（太田氏の字は大田と混同されているが、太田に統一した）をみると、

清和天皇 — 經基王 — 満仲 — 頼光 — 頼国 — 頼綱 — 仲政 — 頼政



資清 — 資長 — 次康 — 資高 — 景資



資元 從五位下美濃守後難髪号浄泉、太田氏第十世

來仕肥前国領河副莊太田郷、西至角町村東至大中島、築太田村居之号田中城、建一寺、号補陀山慈広寺、時剛忠公方管与賀河副等地資元事之命改姓藤原、天文十四年乙巳正月有馬馬場諸將構剛忠公於少弐氏公避於筑後国一木邑三月

資徳 從五位下和泉守 太田氏第十一世
天文廿一年壬子嗣父泉之後、前此一年西肥前十九將、与謀圍佐嘉、深恭公避之於筑後一木村、廿二年癸丑秋七月廿五日依心公与諸族謀納之資徳及鹿江南里内田諸士奉迎諸鹿江崎遂復佐嘉忠勞甚深、弘治二年丙辰二月十二日卒以弟承家、法号 高德院祖翁浄久居士

源舜 從五位下美濃守 太田氏第十二世

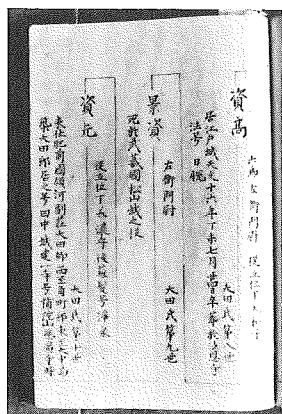
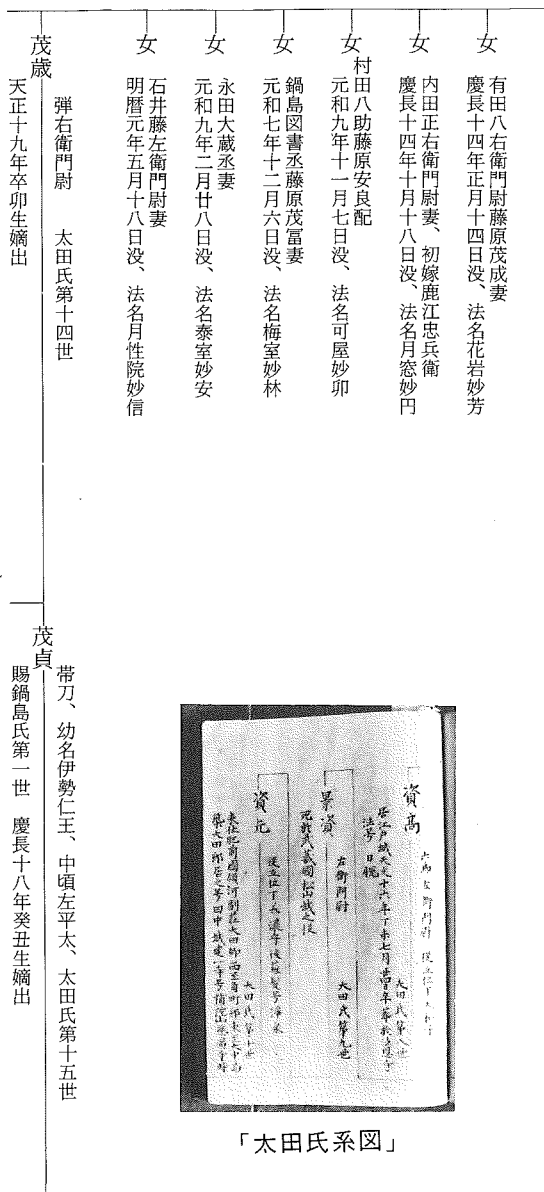
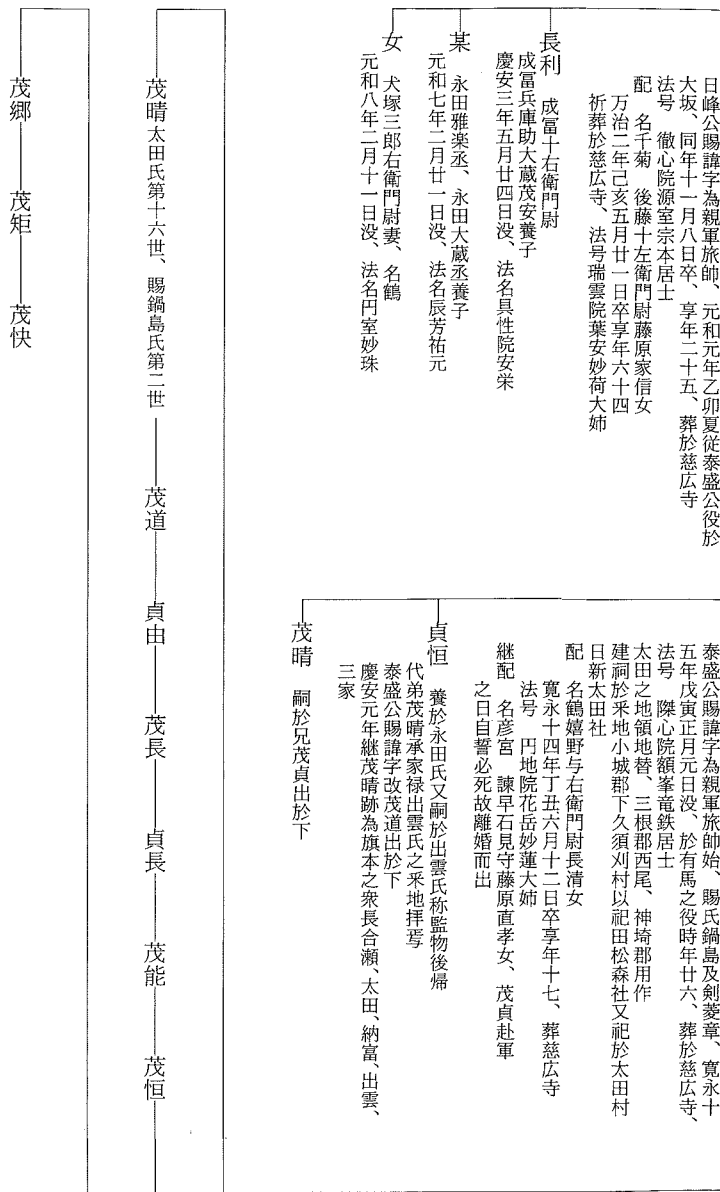
永祿元年戊午閏六月五日嗣兄之後、元龜元年庚午秋八月豊後大友宗麟侵我肥前屢不利、十七日発筑後水軍逼蒲田寺并諸港、源舜与族助日峰公刀戰卻之甚有功、天正四年丙子十二月十二日卒、葬於慈広寺、法号天真院空心源舜居士

家豊 右衛門大夫 從五位下和泉守

功勝公賜諱一字、天正十一年癸未十月奉公命守肥後国内大野城有功
法号宝聚院覚翁浄夢居士

茂連 生左衛門尉 太田氏第十三世

天文十六年丁未生
日峰公初諱信生因賜生字為称後
公改諱直茂又賜茂字、加於名代兄頼太田郷、天正十二年甲申三月廿四日納富能登守家景死於島原之役実陽泰夫人前夫之子而無後
公愍之命茂連併承其家及采地（小城郡高原ヶ里、池上ヶ

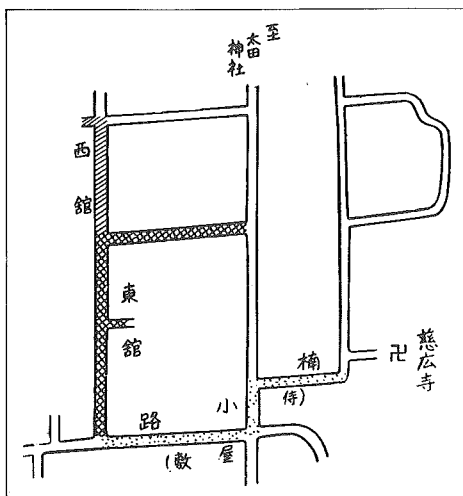


「太田氏系図」

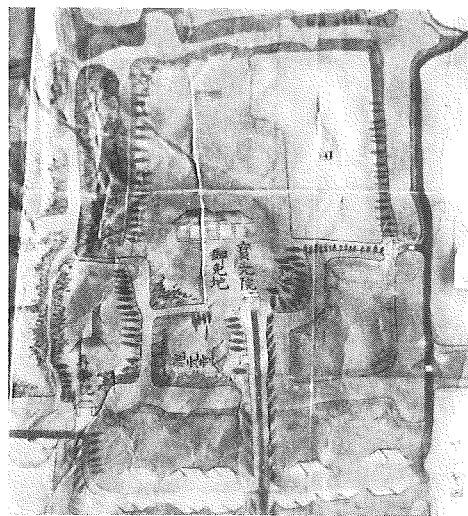
里、上・下久須ヶ里、茲年夏大友宗麟攻黒木兵庫頭於筑後国猫尾城
功勝公命茂連及成富茂安援之擊卻大友軍既尸次道雪、高橋紹雲、自筑前未侵筑後困茂連於酒見城不克茂連之功為多、元和五年己未十月廿九日卒、享年七十三、葬於慈広寺、法号円成院夷相源真居士
配 日峰公女実
陽泰夫人前夫納富治部太輔家繁女
公養為女嫁於茂連元和六年庚申二月八日卒
祈葬於慈広寺、法号瑞光院月昌妙江大姉

つまり要約すると、清和天皇の第六皇子貞純親王より出た太田氏は資長（持資）の時、長祿元年（一四五七）江戸・川越・岩槻に城堡を築いた。歌人として名高い太田道灌とはこの人である。資長（道灌）の四代の孫の資元（太田氏第十代）は、享祿年間（一五二八〜三二）に肥前国河副庄の太田村を領した。資元は太田美濃守資元入道浄泉と称した。資元（浄泉）がいかなる理由で肥前

図10 太田の通称地名



に下向してきたかは不明であるが、小田氏のように東国御家人の西国下向のひとつであろうと考えられる。当時龍造寺山城守家兼（剛忠）の武威は強大化しつつあり、既に与賀・川副の郷邑を領有していた。資元（浄泉）は家兼に帰服し、龍家の姓を下賜され、藤原氏に改めた。家兼は蓮池小曲城に拠る小田氏の前衛として、太田の地に田中城を構築させた。家兼としても関東の名家が傘下に組みすること



「川副東郷太田村絵図」の宝光院と田中城跡付近

をよしとしたのである。資元が領有した地域を西は角町より東は大中島にまで及ぶとしているが、当時はまだ大中島は存在しておらず、後世誇張されて表現されたものである。資元の子が源舜である。源舜は兄資徳が早世したため隣江山密厳寺宝光院の二世住侶を辞し、太田家を継いだ。なお、資元が構築した田中城は、寛政四年（一七九二）の『川副東郷太田村絵図』（佐賀県立図書館蔵）によれば、太田神社の南方の宝光院付近にあった。城というより館の形状だったと想像される。絵図によれば太田村も環濠集落をなしており、村は宝光院を中心にして集落を形成していたことがわかる。村中には太田氏の氏寺の慈広寺もみられる。太田部落には現在も東館・西館・館橋・北小路・門前・構口の通称小字名が遺存しており、田中城の面影がしのばれる。

四 小田氏と龍造寺氏

（一）小田覚派（資光）時代

少弐資元討伐を画策する西中国の覇者大内義隆は、その部将杉興運にその命を伝えた。享祿三年（一五三〇）杉興運は肥前に攻め入った。少弐資元は多久の梶峰城に退き、その子松法師丸（のちの冬尚）は神埼の勢福寺城に入った。少弐党の龍造寺家兼、その子家純・家門・盛家や小田政光（資光の孫）等は、神埼郡直鳥（現千代田町直鳥）の犬塚家清とその子尚家や、少弐氏譜代の将江上武種や馬場頼周と共に大内勢と攻防をくり返した。八